大坂城跡発掘調査（OS11－16次）
現地説明会資料

平成24(2012)年３月24日(土)

大阪市教育委員会・(財)大阪市博物館協会 大阪文化財研究所

■ 今回の発見

平成23年11月下旬から、大坂城跡の北西隅(中央区北浜東４番、大林ビルディング西隣)で、約1,200㎡の発掘調査を行った結果、現地表下３～５mで、豊臣期の16世紀末頃に実施された大規模な造成工事を示す土手状遺構や、粘土の壁で囲われた中に砂を入れて盛土をする、珍しい土木技術が確認されました。さらに土手状遺構の下位にはより古い豊臣期や、鎌倉時代、奈良時代末などの生活面が続いていることがわかりました。

■要衝の地の調査

調査地は豊臣期大坂城を取り囲む最も外側の防御施設である、惣構(そうがまえ)の北西隅に当たり、大川と東横堀川、浜(土佐堀)通りと松屋町筋が交差する交通の結節点に立地しています(図１)。これまで1986・87・92年度の３度の調査により(図２)、豊臣期の巨大な武家屋敷地(東西125m、南北60m)が発見され、豊臣政権の五奉行クラスの有力大名の屋敷地ではないかと考えられています。

■土手状遺構と珍しい盛土の工法

土手状遺構はこの屋敷地の下位で、調査区を北西－南東方向に横断するように発見されました。周辺の土砂を掘削し集めて盛り上げ、上幅約2.5m、下幅10m、高さ２mで、長さ40m以上あります(図５)。全体造成のための土砂は土手を軸に流されており、土手はその地業のための作業道であり、大規模造成の骨格であったと考えられます。豊臣期の城下町建設には幾度かの画期がありますが、今回のものは東横堀川沿いの低地部を一挙に町場化した、慶長３(1598)年から翌年に行われた「大坂町中屋敷替(ちょうちゅうやしきがえ)」(※裏面参照)に当たる可能性が高いと考えられます。

土手の高さまでの２mの盛土は､大きく２段階からなります。様々な土砂が用いられていましたが、多くを占めるのは北の大川から運ばれたと考えられる川砂でした。盛土の上部では、粘土で床や壁を作って、砂を充填させる特別な工法が取られていました。とりわけ調査区の東部に顕著で、土手状遺構と直交するように、幅３～４m、長さ３～６mの長方形の区画が見つかりました(図４)。粘土の板でできた仕切りは厚さ５cm前後で、最も高いものでは約80cmあり、その多くは柱・杭や横材で補強されていました。さらに上面も粘土層で覆われ、あたかも砂を直方体にパックして、土地全体をかさ上げしているような状況です。現在、類例を調査中ですが、同様なものが確認できず、非常に珍しい土木技術の一例と言えます。手の込んだ地業は、武家屋敷建設を考えた特別な工法か、近くにある豊富な川砂を利用し、安定した地盤を形成するために考案された工夫なのか、あるいは当時良く知られた技術であったのか、今後の検討課題です。

土手状遺構そのものは、調査地の周辺ではこれまで４カ所で確認され、最も近いところでは、南に40m離れたOS89－148次調査例があります(図６)。ただ、いずれの調査も小面積で、その役割の特定は困難でした。今回の発見は大規模造成の骨格とともに、その細部に用いられた技術、近世大阪の都市改造(開発)の実態を良く示す資料と言えるでしょう。

■土手状遺構の下には・・

現在も調査中ですが、土手状遺構の下位には、より古い豊臣期や、鎌倉時代、奈良時代末の生活面があり、井戸や柱穴などの生活跡・遺物が検出されています(図７)。古代の出土遺物では四天王寺や難波宮に用いられた瓦と同じ瓦も数点出土していることも注目されます。この地域は難波津や渡辺津という重要な港湾施設が想定される場所でもあり、調査の推移が期待されます。

略年表

天正八年	(1580)	大坂本願寺、焼亡する
十年	(1582)	織田信長、本能寺の変で倒れる。
十一年	(1583)	秀吉、畿内を勢力下に置き、大坂城本丸工事始める（～1585年）
十三年	(1585)	秀吉、関白となる。豊臣姓を朝廷より下賜される
十四年	(1586)	大坂城二の丸工事始める（～1588年）
		秀吉、太政大臣となる
文禄元年	(1592)	文禄の役、はじまる
二年	(1593)	秀頼、誕生。秀吉、伏見城に移る
三年	(1594)	大坂惣構堀工事の開始
慶長元年	(1596)	慶長伏見地震
三年	(1598)	三の丸の築造、大坂町中屋敷替えの大工事始まる
		秀吉、伏見城に没す
五年	(1600)	関ヶ原の戦
八年	(1603)	徳川家康、征夷大将軍に就任、江戸に幕府を開く
二十年	(1615)	大坂夏の陣で大坂城落城し、全城焼亡、豊臣氏滅ぶ

図１　豊臣氏大坂城と調査地の位置

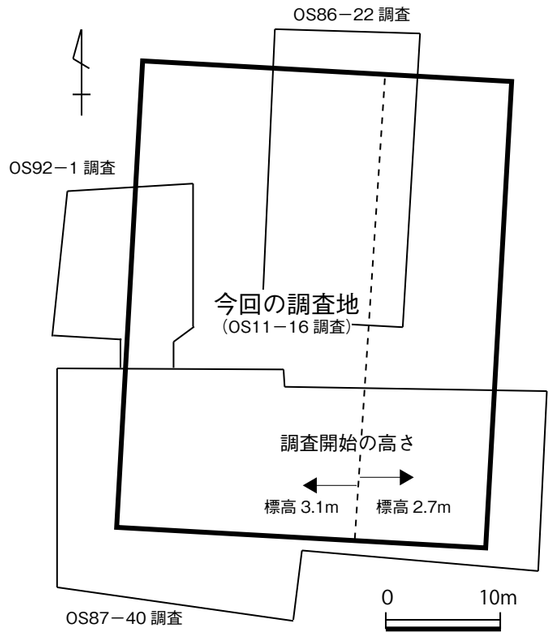

図２　今回の調査と過去の調査

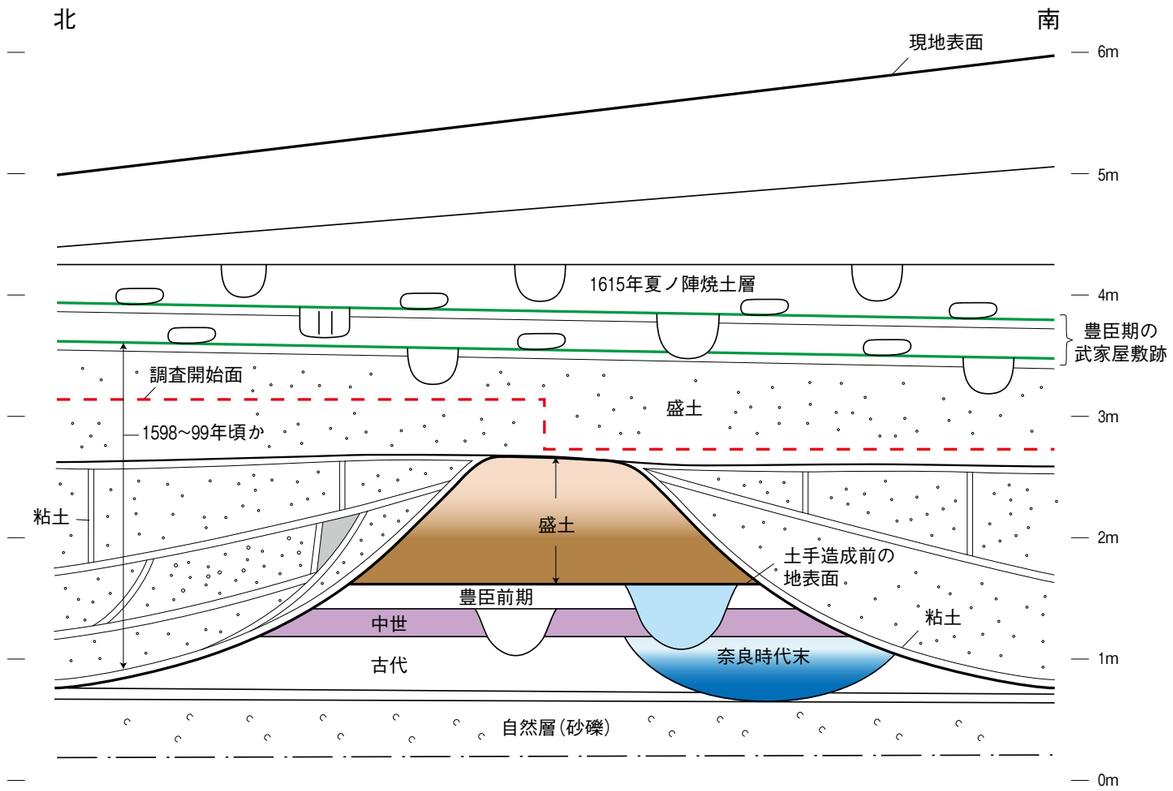

図３　調査地の層序模式図

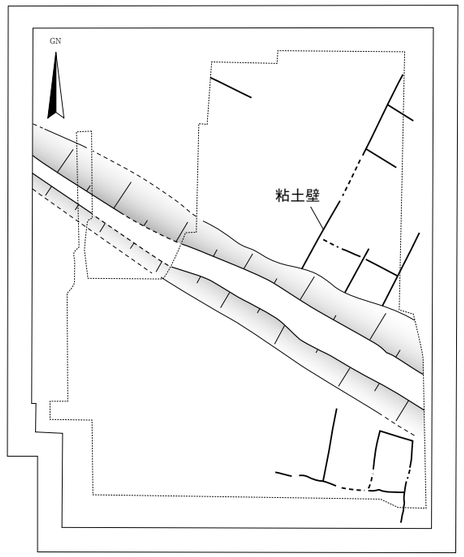

図４　盛土上部で見つかった粘土の壁

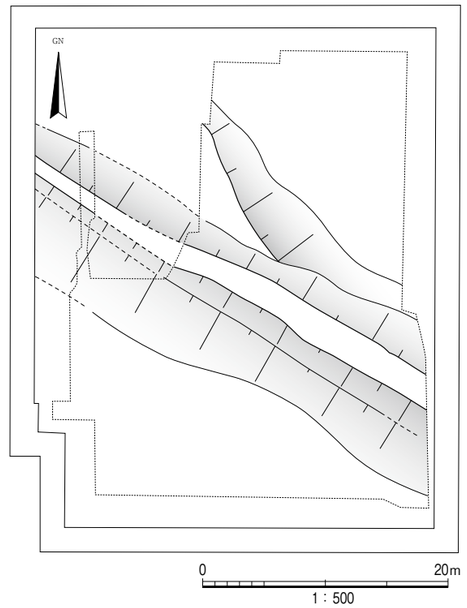

図５　土手状遺構全体図

用語解説

■ 大坂町中屋敷替（ちょうちゅうやしきがえ）

豊臣秀吉はその晩年の慶長3(1598)年に、息子秀頼のために大坂城、城下町の大規模な改造を命じます。三の丸の築造により、城郭内を武家で固め、商工者の町家を城郭外に移転させ、防御と商工機能を高めることを目的としたものです。豊臣氏大坂城の第４期工事に当たります。

第１期工事＝本丸築造(1583～85年)

第２期工事＝二の丸築造(1586～88年)

第３期工事＝惣構堀掘削(1594年)

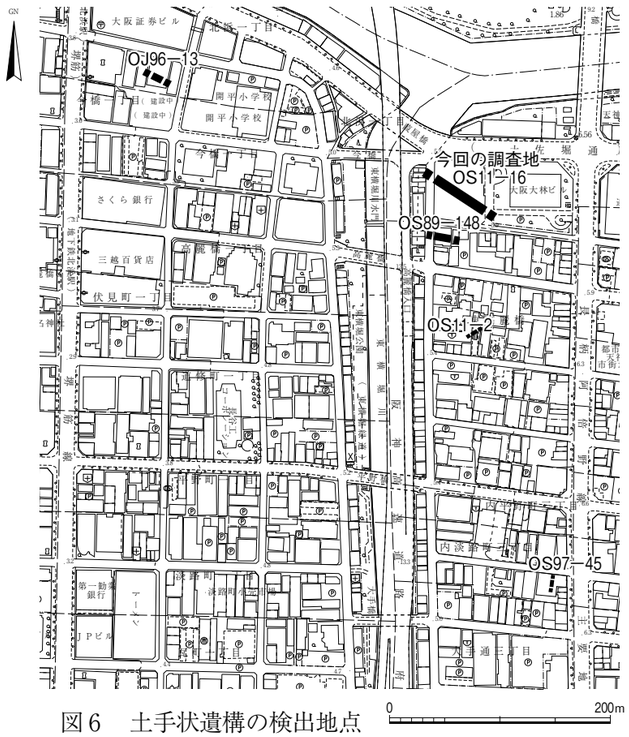

図６　土手状遺構の検出地点

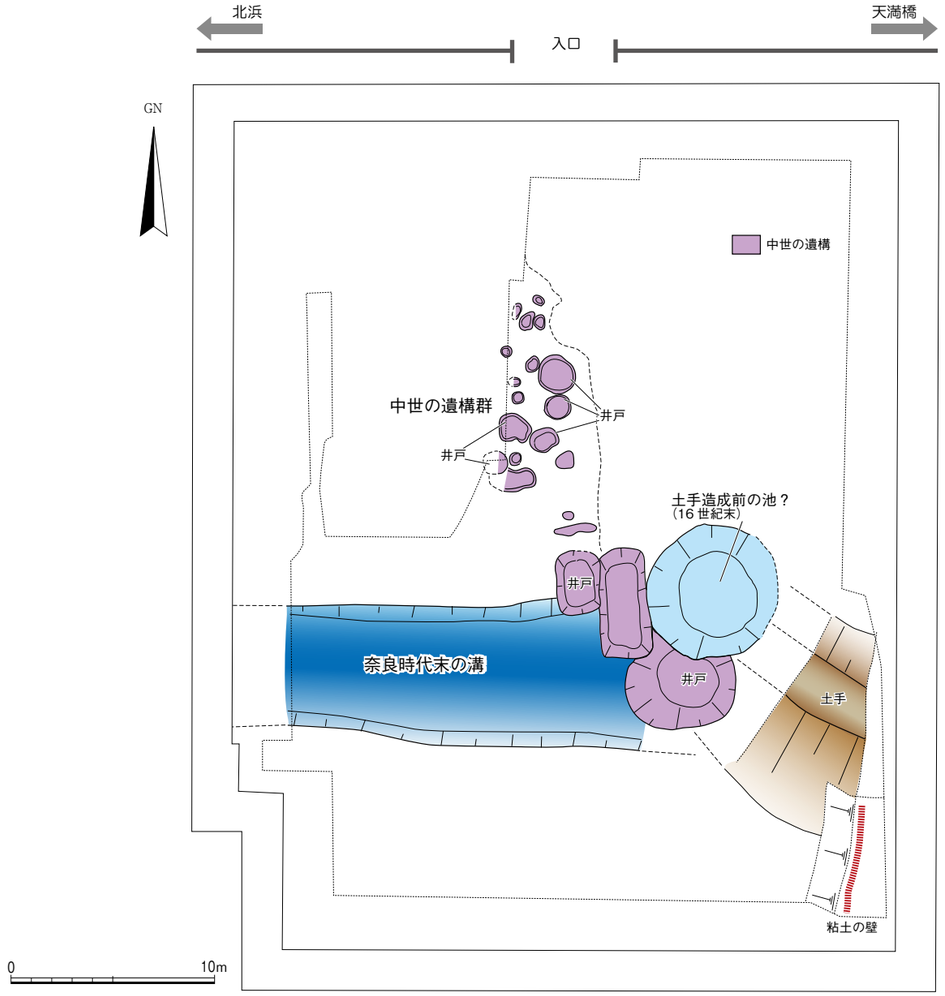

図７　現在の調査状況